

# post-event processing Questionnaire 日本語版の開発 — 社交不安症状の維持に影響する回顧的思考の測定 —

五十嵐友里<sup>1)2)</sup>・嶋田 洋徳<sup>3)</sup>

Development post-event processing questionnaire Japanese version.

—Measurement of retrospective thinking that affects the maintenance of social anxiety symptoms—

Yuri IGARASHI・Hironori SHIMADA

## 要旨

社交不安が高い人の特徴として、社交場面を終えた後の回顧的な認知的処理である post-event processing (PEP) が位置づけられている (Clark & Wells, 1995)。Rachman et al. (2000) は、PEP を測定する自己記入式尺度として post-event processing Questionnaire (以下 PEPQ) を作成し、McEvoy & Kingsep (2006) によって、さらに信頼性と妥当性が確認され、PEP を測定する尺度として用いられてきた。しかしながら、PEPQ は未だ日本語による標準化を経ていない。PEP を適切に測定するためには、PEPQ 日本語版の作成と標準化を行うことは急務であるといえる。したがって、本研究では PEPQ 日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討を行った。

キーワード：社交不安障害、社交不安、post event processing、反すう、心配

## 問題と目的

社交不安障害における認知アプローチは行動の理解と予測に大きく貢献することから、社交不安の認知プロセスの解明が盛んに行われている。なかでも、社交不安者は社会的な場面を回避したりやりすごしたりすることですぐにネガティブな気分や苦痛が終わるわけではなく、出来事についての事後の検討を行うことがしばしばであることが指摘されている<sup>1)</sup>。こうした社交不安者における出来事の事後の認知的処理は post event processing (PEP) と呼ばれ、「個人が経験した社会的場面について回顧し、さらにその認知がネガティブな感情価を持つ処理」と定義される<sup>2)</sup>。PEP は社交不安障害の治療

反応性にも影響を及ぼすことが示唆されている<sup>3)</sup>。

社交不安者の出来事の事後の認知的処理には、PEP に相当する概念としてさまざまな用語が当てられてきた (たとえば、“post-event processing<sup>4)</sup>”, retrospective brooding<sup>5)</sup>, “Rumination<sup>6)</sup>”)。これは、PEP が主に反すうとの明確な区別がなされてこなかったためと考えられ、用いる語によってそれぞれの研究者の考え方が推察される (たとえば、PEP と反すうを同一のものと考えているかどうか)。また、PEP は予期不安との関連も指摘されている。Clark & Wells (1995)<sup>1)</sup>では、予期と PEP が同じ項で説明され、PEP が活性化されているときの思考内容として、将来経験するだろう同じような社会的状況における他者からの評価が含まれると示唆している。したがって、未来志向的な心配と PEP にも類似点があると考えられる。

そこで、五十嵐・嶋田 (2009)<sup>7)</sup>は、PEP と

五十嵐友里<sup>1)2)</sup>・嶋田 洋徳<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 東京家政大学 人文学部 心理カウンセリング学科  
医療心理研究室

<sup>2)</sup> 埼玉医科大学 総合医療センター メンタルクリニック

<sup>3)</sup> 早稲田大学 人間科学学術院

反すう、心配の思考様式を比較検討し、この3つの認知的処理にはそれぞれの特徴があることを示唆し、異なる処理であることを明らかにしている。具体的には、PEP、反すう、心配の順で過去志向的であること、また、PEPは他の認知的処理とは異なり、特定の出来事を他者視点で振り返るイメージを回顧していることが大きな特徴として示された<sup>7)</sup>。

しかし、現在わが国にはPEPを適切に測定できる尺度は整備されていない。Rachman et al. (2000)<sup>8)</sup>は、PEPを測定する自己記入式尺度としてpost-event processing Questionnaire (以下PEPQ)を作成し、McEvoy & Kingsep (2006)<sup>9)</sup>によって、さらに信頼性と妥当性が確認され、PEPを測定する尺度として用いられてきた。しかしながら、PEPQは未だ日本語による標準化を経ていない。PEPを適切に測定するためには、PEPQ日本語版の作成と標準化を行うことは急務であるといえる。

また、上述のとおりPEPと反すう、心配の類似点を考慮すると、それらを測定し分ける上でもPEPを測定できる尺度を検討する必要がある。したがって、本研究では、それらの回顧的思考との異同にも考慮しながら、PEPQ日本語版を作成することを目的とした。なお、再検査信頼性を含む信頼性の検討、因子的および、構成概念、弁別的、判別的妥当性の検討を行い、尺度の信頼性と妥当性の確認を行なった。

## 方法

本研究では、因子的妥当性・構成概念妥当性・弁別的妥当性の検証調査、再検査信頼性の検証調査、判別的妥当性の検証調査の3つの調査を行なった。

### 調査対象者：

因子的妥当性・構成概念妥当性・弁別的妥当性

の検証調査…

関東および、九州、中国地方の4年制大学、短期大学に在籍する611名(男性243名、女性368名、平均年齢 $19.70 \pm 2.31$ 歳)を対象に調査を行った。

再検査信頼性の検証調査…

関東近郊の4年制大学に在籍する42名(男性20名、女性21名、性別不明1名、平均年齢 $19.02 \pm 2.8$ 歳)を対象に2回に渡って調査を行った。

判別的妥当性の検証調査…

医師のDSM-IV-TRの診断基準による診断を受けた社会不安障害患者17名。関東近郊の総合病院メンタルクリニックに外来通院しており、全員医師による処方を受けていた。処方の内容は、抗不安薬、抗うつ薬が主であり、睡眠導入剤が3名、抗てんかん薬が2名に処方されていた。

### 調査材料：

因子的妥当性・構成概念妥当性・弁別的妥当性の検証調査…

① Rachman et al. (2000)<sup>8)</sup>によるPost-event processing Questionnaire (PEPQ)を日本語訳したもの。

翻訳に際しては原著者から許諾を得た。日本語訳は、筆者が作成したものを臨床経験の豊富な臨床心理士1名と英語に熟達した臨床心理士1名が評価し、より適切なものに修正した。そして、その日本語訳について、英語を母国語とし、日本語に堪能な英語担当教師によってバックトランスレーションが行われ、適切な日本語であることが確認された。

過去2週間の間に不安を感じた社会的場面についての考え方にどの程度当てはまるかについて11件法(「0. 全くあてはまらない」～「100. 非常にあてはまる」)で回答を求めた。

② 日本語版反応スタイル尺度(名倉・橋本,

1999<sup>10)</sup> : Response Style Questionnaire)。

反すうの測定には、日本語版反応スタイル尺度 (RSQ) を用いた。RSQ は、抑うつに対する個人の考え込み傾向を測定する尺度である。RSQ は、「否定的考え込み」、「分析的考え込み」、「気晴らし」、「対人関係欲求」の4つの下位尺度を持つ。「否定的考え込み」が反すうを測定していると仮定される。

憂うつな気分を感じたとき、各項目の事柄を普段どの程度行ったり考えたりしたかについて、4件法（「1. ほとんどなかった」、「2. ときどきあった」、「3. しばしばあった」、「4. ほとんどいつもそうだった」）での回答を求めた。

③ Penn State Worry Questionnaire 日本語版 (杉浦・丹野, 2000<sup>11)</sup> : PSWQ)。

PSWQ は、心配の頻度やその強度を測定する尺度である。心配の測定のために用いた。回答は5件法（「1. 全くあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. どちらでもない」、「4. ややあてはまる」、「5. かなりあてはまる」）で求めた。

④ Short Fear of Negative Evaluation Scale

(笹川・金井・村中・鈴木・嶋田・坂野, 2004<sup>12)</sup> : SFNE)

他者評価懸念の測定に SFNE を用いた。回答は5件法（「1. 全くあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. どちらでもない」、「4. ややあてはまる」、「5. かなりあてはまる」）で求めた。

⑤ Social Avoidance and Distress Scale (石川・佐々木・福井, 1992<sup>13)</sup> : SADS)

SADS は、社会的場面からの回避行動を測定するために用いた。回答は2件法（「はい」、「いいえ」）で求めた。

⑥ 自己評価式抑うつ性尺度 (福田・小

林, 1973<sup>14)</sup> : SDS)

SDS は、抑うつを測定するために用いた。回答は4件法（「1. 全くあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. あてはまる」、「4. とてもよくあてはまる」）で求めた。

再検査信頼性の検証調査、判別的妥当性の検証調査…PEPQ を日本語訳したもの。

**手続き：**

因子的妥当性・構成概念妥当性・弁別的妥当性の検証調査、再検査信頼性の検証調査…

調査対象者が聴講した大学の授業を実施した教場において集団で実施された。なお、データは統計的に集団で処理されること、および個人情報保護について紙面で説明を行った。

再検査信頼性の検証調査…

2カ月の間隔をおき、2回の調査が行われた。判別的妥当性の検証調査…

主治医より、研究の概要、目的、方法、研究協力の任意性と撤回の自由、研究参加による利益と不利益、個人情報の保護について書面を用いて十分な説明を行い、書面にて協力の同意を得た。その場で時間的余裕のあった患者は、その場で回答した。その場で回答が難しかった患者は、調査用紙を持ち帰り、次回診察時に持参した。なお、臨床群による調査Ⅲは、埼玉医科大学総合医療センター倫理委員会（申請番号167）、および早稲田大学人間科学学術院研究倫理委員会への申請を行い、承認を得た上で実施した。

**信頼性に関する仮説：**

信頼性を検討するために下記2つの仮説を立てた。仮説1：Chronbachの $\alpha$ 係数によりPEPQの内的整合性が確認される。仮説2：2ヶ月の間隔を経て調査されたPEPQの得点で安定性が示される。

**妥当性に関する仮説：**

妥当性を検討するために多視点からの下記5つの仮説を立てた。仮説1（因子的妥当性）：PEPQ 日本語版は原版と同様の1因子構造を示す。仮説2（構成概念妥当性）：PEPQ は、社交不安の特徴であるとされる他者評価懸念（SFNE で測定される）や回避行動（SADS で測定される）、社交不安症状と並存しやすい抑うつ症状（SDS で測定される）と正の相関を示す。仮説3（構成概念妥当性）：PEPQ は、類似する反復的思考である反すう（否定的考え込み尺度で測定される）や心配（PSWQ で測定される）と正の相関を示す。仮説4（弁別的妥当性）：反すう測定する日本語版反応スタイル尺度と心配を図る PSWQ, PEPQ のドッキング因子分析の結果、PEPQ は独立した因子構造を持つ。仮説5（判別的妥当性）：社会不安障害の診断を受けた患者群の PEPQ 得点は大学生の PEPQ 得点に比して有意に高い。

## 結 果

### 分析対象：

因子的妥当性・構成概念妥当性・弁別的妥当性  
検証調査…

記入漏れや記入ミスのあった回答を除き、有効回答者425名（男性174名、女性251名、平均年齢 $19.60 \pm 1.64$ 歳）を分析の対象とした。

### 再検査信頼性の検証調査…

計2回の調査におけるデータが揃った者から、記入漏れや記入ミスのあった回答を除いた有効回答者35名（男性16名、女性18名、性別不明1名、平均年齢 $19.00 \pm 3.0$ 歳）を分析の対象とした。

### 信頼性の検討：

#### ① 内的整合性による検討

PEPQ 日本語版の内的整合性を確認するために、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、十分な  $\alpha$  係数が得られた（ $\alpha = .86$ ）。

#### ② 再検査法による検討

PEPQ 日本語版の安定性について、調査期間を2カ月あけた再検査法による検証を行った。その結果、両テスト間の安定度係数は  $r = .55$  であり、有意な中程度の一致を示した（ $p < .001$ ）。

### 妥当性の検討：

#### ① 因子的妥当性

PEPQ 日本語版14項目の素点を用いて、McEvoy & Kingsep (2006)<sup>9)</sup>で報告された9項目1因子構造のモデルに基づいた確認的因子分析を行った。なお、分析には Amos16.0を用い、母数の推定は最尤推定法によって行った。分析の結果、PEP に含まれるすべての項目の負荷量は.49～.90と高い負荷量を示していた。抽出された各項目の因子負荷量を Table 1 にまとめ

Table 1 PEPQ の確認的因子分析結果

No	Items ( $\alpha = .86$ )	Loadings
3	再び考えたくないと思っても、その出来事について思い出したり、考えてしまうことがありましたか？	.90
4	その出来事について考えてしまって、あなたが何かに集中するのを邪魔することがありましたか？	.78
2	その出来事が終わった後、気がつく、かなり多くその出来事について考えているということがありましたか？	.76
5	その出来事を忘れることは難しいと思いましたか？	.68
7	その出来事について何度も何度も繰り返し考えた時、 その出来事に対するあなたの気持ちはだんだん悪くなりましたか？	.62
8	時間を戻して、もう一度やり直すことができたらいのにと考えたことがありましたか？	.53
9	その出来事の結果として、あなたは同じような出来事を避けるようになっていますか？ つまり、その出来事によって同じような出来事を避けようとしてより強く思うようになりましたか？	.53
1	どのくらい不安を感じましたか？	.50
6	あなたはその出来事についての考えが出ないように努力しましたか？	.49

Table 2 変数間の相関係数

	PEPQ	FNE	SADS	SDS	PSWQ	否 定 的 考 え 込 み	分 析 的 考 え 込 み	気晴らし	対人関係欲求
PEPQ	1	.31 **	.15 **	.41 **	.42 **	.40 **	.21 **	.09	.20 **
FNE		1	.28 **	.27 **	.53 **	.51 **	.17 **	-.05	.12 *
SADS			1	.36 **	.41 **	.30 **	-.03	-.15 **	-.02
SDS				1	.55 **	.46 **	.07	-.14 **	.11 *
PSWQ					1	.56 **	.18 **	-.07	.13 **
否定的考え込み						1	.56 **	.09	.23 **
分析的考え込み							1	.33 **	.23 **
気晴らし								1	.34 **
対人関係欲求									1

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$ 

た。なお、モデルの適合度は、GFI=.934, AGFI=.890, CFI=.933, RMSEA=.095といずれも十分な値を示しており、モデルに対するデータのあてはまりは良好であると考えられた。以上の結果から、McEvoy & Kingsep (2006)<sup>9)</sup>のモデルは日本語版のPEPQにも当てはまることが確認された。

## ② 構成概念妥当性

PEPQ 日本語版の構成概念妥当性を検討するために、SFNE, SADS, SDS, RSQ の下位尺度, PSWQ との相関係数を求めた (Table 2)。その結果、SFNE, 否定的考え込み, PSWQ, SDS 得点との間に中程度の正の相関が認められ、SADS, 分析的考え込み, 対人関係欲求得点との間に弱い正の相関が示された (いずれも  $p < .01$ )。

## ③ 弁別的妥当性

弁別的妥当性の検討を目的とし、PEPQ, RSQ, PSWQ の項目について探索的なドッキング因子分析を行った。その結果、スクリープロットの形状から、4 因子構造が妥当であると判断された。因子数を指定して再度同様の分析を行った結果、71項目4因子が抽出された。抽出された因子と各項目の因子負荷量、 $\alpha$  係数、因子間相関を Table 3 にまとめた。

第一因子には、RSQ における「否定的考え込み」、「分析的考え込み」下位尺度に含まれる項目が含まれていたため、第一因子は「考え込み」と解釈された。第二因子は PSWQ と、第

三因子は PEPQ と同様の項目から構成されていた。したがって、第二因子は心配、第三因子は PEP と判断された。最後に、第四因子は、RSQ における「気晴らし」と「対人関係欲求」下位尺度に含まれる項目で構成されていたことから、気晴らしと解釈された。すなわち、考え込み、心配、PEP は、それぞれ独自の因子が抽出され、それぞれの尺度に含まれる項目群は異なる概念を測定していることが示唆された。

## ④ 判別的妥当性

学生群と社会不安障害群における平均点を比較することで判別的妥当性の検討を行った。社会不安障害患者の平均年齢は30.94歳、学生の平均年齢は19.64歳で、年齢差が見られたことから ( $t [438] = -19.97$ ,  $p < .01$ )、年齢を共変量とした共分散分析を行った。その結果、学生群よりも社会不安障害群の得点が有意に高いことが認められた ( $F [1, 437] = 4.10$ ,  $p < .05$ )。この結果から、PEPQ は社会不安障害患者と大学生を判別することが可能であることが示唆された (学生群平均 =  $484.60 \pm 193.96$ , 臨床群平均 =  $599.41 \pm 193.99$ )。

## PEPQ の性差：

対象者全体における平均得点は485.20、標準偏差は194.13であった。PEPQ の性差を検討するため、PEPQ の得点を従属変数とし、性を要因とする分散分析を行った。その結果、性の主効果の有意傾向が認められ ( $t [1, 421] = -1.88$ ,  $p < .10$ )、女性は男性よりも PEPQ の得点が高い

Table 3 ドッキング因子分析結果

No.	Items		Factor loadings			
			I	II	III	IV
I. 考え込み ( $\alpha=.92$ )						
RSQ51	分	自分の憂うつな気持ちに注目することで自分自身を理解しようとする	0.68	-0.12	-0.09	0.03
RSQ39	分	自分がなぜ憂うつなのかを理解するために自分のパーソナリティを分析する	0.61	-0.09	-0.05	-0.01
RSQ28	否	「自分には何か間違っていることがある。そうでなければこんな風には感じないだろう」と考える	0.61	0.02	0.03	0.04
RSQ20	分	一人になって、自分がなぜこのように感じるのかを考える	0.60	-0.06	0.01	0.00
RSQ10	否	「自分はこのことに値するようなことを何かしているのだろうか」と考える	0.60	-0.07	-0.02	0.00
RSQ45	否	自分自身に対してどれだけ怒りを感じているかを考える	0.59	0.00	-0.01	0.02
RSQ49	分	自らを孤立させ、なぜ自分が悲しみを感じているのかを考える	0.58	-0.02	0.06	-0.04
RSQ17	否	「自分はずえいつもそのようなやり方で反応するのか」と考える	0.58	0.04	-0.09	-0.03
RSQ30	否	「自分はずえ物事をうまく処理していないのだろうか」と考える	0.56	0.20	-0.09	-0.03
RSQ50	否	「自分には深刻な問題点があるに違いない。そうでなければ、これほど頻繁にこのような感じかたをしないだろう」と考える	0.56	0.17	0.00	-0.02
RSQ14	分	自分がなぜ憂うつなのかを理解するために最近の出来事を分析する	0.56	-0.14	0.02	0.06
RSQ32	否	自分の欠点、短所、過失、間違いの全てを考える	0.56	0.16	0.03	-0.07
RSQ23	分	状況がよくなることを願って、最近の状況について考える	0.55	-0.19	0.00	0.24
RSQ35	否	「自分にはこのように感じる資格はない。自分は本当に利己的だ」と考える	0.54	0.05	0.01	0.04
RSQ29	否	「なぜ自分は他の人にない問題を抱えているのだろうか」と考える	0.53	0.10	0.01	-0.05
RSQ16	否	「自分はずえ動き出せないのだろうか」と考える	0.52	0.09	-0.11	-0.03
RSQ31	否	自分がどれだけ悲しみを感じているかを考える	0.49	0.17	0.10	0.01
RSQ36	否	「私の友人は自分および自分の問題点にうんざりしている」と考える	0.48	0.15	0.03	-0.08
RSQ34	否	何かをする元気が自分にどれだけないかを考える	0.47	0.16	-0.03	0.04
RSQ11	否	自分がどれだけ消極的でやる気がないと感じているかを考える	0.46	0.08	-0.02	-0.12
RSQ13	否	「自分は家族や友人を当惑させている」と考える	0.42	0.14	0.03	-0.01
RSQ5	否	自分の疲労感や痛みについて考える	0.42	0.04	0.08	-0.06
RSQ3	否	自分がどれだけ孤独を感じているかを考える	0.42	0.09	0.14	-0.14
RSQ8	否	「人々は本当の私がどんな風なのかを知るだろう」と考える	0.40	0.00	0.06	0.10
RSQ47	否	以前に憂うつを感じたときのことを思い起こす	0.40	0.09	0.05	-0.01
RSQ42	分	自分の気持ちについて考えるために独りでどこかに行く	0.38	-0.14	0.08	0.10
RSQ46	否	自分が他の人に対してどれだけ怒りを感じているかを考える	0.38	0.00	0.16	0.08
RSQ37	分	自分の生活をどこか改善しようと決意する	0.35	0.03	-0.11	0.27
RSQ6	否	集中するのがどれだけ困難であるかを考える	0.33	0.11	-0.03	0.07
RSQ22	気	過去にそのおかげで自分の気分がよくなったことを何かする	0.31	-0.03	-0.09	0.39
RSQ48	分	「自分にはコントロールできることがある」と考える	0.31	-0.23	0.04	0.25
II. 心配 ( $\alpha=.92$ )						
PSWQ12		昔からずっと心配性だった	0.02	0.84	-0.07	0.00
PSWQ14		一度思い悩みだすとやめることができない	0.04	0.81	-0.03	0.07
PSWQ5		思い悩む必要はないとわかっているが、そうしないではいられない	0.04	0.77	-0.02	0.05
PSWQ7		いつも何か心配している	0.10	0.75	-0.04	0.03
PSWQ11		ある事柄についてやるだけのことをやった後は、それについて思い悩むことない	-0.13	0.74	-0.01	-0.01
PSWQ2		自分の心配事に圧倒されてしまう	0.03	0.70	0.05	0.04
PSWQ13		自分は心配ばかりしている人間だと思う	0.03	0.67	0.07	0.05
PSWQ3		自分は物事について思い悩む方ではない	0.07	0.64	-0.01	-0.04
PSWQ6		プレッシャーがかかると、過剰に心配してしまう	-0.05	0.62	-0.03	0.12
PSWQ8		気にかかることを忘れるのは簡単である	-0.04	0.60	0.04	-0.04
PSWQ9		一つの課題を終えたとたんに、やらなくてはならない他のあらゆることについて心配し始める	0.10	0.56	-0.02	-0.07
PSWQ15		いつも心配している	0.05	0.56	0.01	0.06
PSWQ4		様々な状況で気をもむ	0.10	0.55	0.02	-0.06
PSWQ16		物事をやりはじめたら、終わるまで、気をもみつつける	0.06	0.41	0.00	0.08
PSWQ1		何かをするとき十分な時間がとれなくても、そのことで気をもみはしない	-0.02	0.36	0.03	-0.01
III. Post-event processing ( $\alpha=.87$ )						
PEPQ3		再び考えたくないと思っても、その出来事について思い出したり、考えてしまうことがありましたか？	0.06	-0.01	0.87	-0.01
PEPQ2		その出来事が終わった後、気がつくとき、かなり多くその出来事について考えているということがありましたか？	0.12	-0.09	0.76	-0.02
PEPQ4		その出来事について考えてしまっ、あなたが何かに集中するのを邪魔することがありましたか？	0.06	0.01	0.75	0.01
PEPQ6		その出来事を忘れることは難しいと思いましたか？	0.03	0.05	0.65	-0.04
PEPQ8		その出来事について何度も何度も繰り返し考えた時、その出来事に対するあなたの気持ちはだんだん悪くなりましたか？	0.02	0.06	0.60	-0.08
PEPQ12		時間を戻して、もう一度やり直すことができたらしのにと考えたことがありましたか？	-0.15	0.04	0.58	0.10
PEPQ13		その出来事の結果として、あなたは同じような出来事を避けるようになっていますか？	-0.07	0.00	0.56	0.06
PEPQ7		つまり、その出来事によって同じような出来事を避けようとしてより強く思うようになりましたか？	-0.04	-0.04	0.52	0.07
PEPQ1		あなたはその出来事についての考えが出ないように努力しましたか？	0.14	0.11	0.39	-0.02
IV. 気晴らし ( $\alpha=.76$ )						
RSQ38	気	友人と何か楽しいことをする	-0.20	0.08	0.04	0.73
RSQ33	気	楽しめることを何かする	-0.16	-0.04	0.02	0.69
RSQ24	気	「外出して何か楽しいことをしよう」と考える	-0.10	0.12	-0.01	0.68
RSQ26	気	人々の輪の中にいる	-0.16	-0.02	0.16	0.60
RSQ19	気	自分のフィーリングから心を離すために気に入りの場所へ行く	0.09	0.01	-0.08	0.47
RSQ52	気	自分の気持ちから気を逸らすために何か活動的なこと（例えばジョギング、エアロビクス、体操など）をする	-0.04	0.01	0.02	0.44
RSQ21	対	自分の尊敬する見解を持つ誰か（友人・家族・牧師など）と話し合う	0.15	0.01	0.09	0.41
RSQ9	気	「自分の気分を良くするために何かしよう」と考える	0.15	0.04	-0.05	0.37
RSQ15	気	空想・夢想したり、良いことを考える	0.15	-0.08	0.04	0.35
RSQ18	気	気分転換するためにテレビを見る	-0.16	0.17	-0.02	0.35
RSQ25	分	問題を克服するために計画を立てる	0.27	-0.12	-0.06	0.34
RSQ43	気	食べる	-0.12	0.27	0.08	0.31
Eigenvalue			14.36	5.77	3.90	2.90
Factor correlation			I	II	III	IV
I			1.00	0.48	0.12	0.38
II				1.00	-0.18	0.45
III					1.00	0.07
IV						1.00

Note. 否＝否定的考え込み；分＝分析的考え込み；気＝気晴らし；対＝対人関係希求。

傾向にあることが示された。このことから、女性は男性よりも、経験した社会的場面の回顧的な思考が活性化される傾向がより強く見られる可能性があることが明らかになった。

## 考 察

本研究の目的は PEPQ の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった。

まず、内的整合性の観点から信頼性の検討を行った結果、PEPQ 日本語版には十分な信頼性が示された。さらに2時点における調査によって再検査信頼性の検討を行った。この調査では2カ月という比較的長い期間をあけて再検査を行った結果、その両テスト間の安定度係数は中程度のものではあった。PEPQ 日本語版は、過去2週間の間に社会的状況において不安を感じたかを確認し、その出来事についての回顧的思考について質問をする形態をとっている。そのため、回答者が念頭においた出来事のインパクトによって、回答の得点に変化しうる。さらに、2ヶ月の間に回答者が経験する社会的出来事の不安心度は多様であることも想定されるため、PEP の活性化はいつも同じレベルで活性化されているとは考えにくい。そうした背景を考慮すると、得られた安定度係数は十分な値を示していると考えられ、PEPQ 日本語版は信頼性を有する尺度であることが示唆されたといえる。

妥当性の検討では、因子的妥当性、構成概念妥当性、弁別的妥当性、判別的妥当性の多視点からの検討が行われた。因子的妥当性の検討では、確認的因子分析の結果、PEPQ 日本語版は McEvoy & Kingsep (2006)<sup>9)</sup>で報告された9項目1因子構造のモデルを支持し、1因子構造であることが確認された。したがって、PEPQ 原版と同様に採用された項目の総得点によって PEP の活性化が測定されることが示された。

PEP は社交不安の高い人に認められる特徴であるため、社交不安症状の代表であるとされる他者評価懸念や社会的場面からの回避行動、さらに社交不安症状と高い確率で並存しやすい抑うつ症状が外的基準として考えられた。また、類似する反復的思考である反すうと心配も外的基準となりうると想定し、これらの変数との相関係数を算出した。その結果、否定的な感情価値を伴う認知を測定する他者評価懸念、抑うつ症状、心配、否定的考え込み（反すうの測定）と中程度の相関が認められた。回避行動との関係は弱いことが示されたが、思考と行動という大きな特徴の差異が影響したと考えられた。さらに、分析的考え込みと対人関係欲求にも弱い正の相関が認められた。分析的考え込みと PEP は反復的思考であるという共通点、対人関係欲求には対人に関する思考であるという共通点が影響し、弱い相関が示されたと考えられた。気晴らしとの相関は得られず、行動的で思考から距離を置くこの対処法との関連がなかったことは仮説を支持するものであった。上記のことから、関連が強いと予測された変数との中程度の相関関係が認められ、基準関連妥当性は概ね確認されたと推察された。

一方では、弁別的妥当性の確認のために、反すうを含む考え込みスタイルを測定する RSQ と心配を測定する PSWQ によるドッキング因子分析が行われた。その結果、RSQ に「考え込み（反すうを測定する否定的考え込みも含まれる）」と「気晴らし」因子、PSWQ が測定する「心配」、PEPQ が測定する「PEP」を測定する項目群を含む4つの因子が抽出された。したがって、反すうと心配、PEP は、反復的思考である共通点を持つものの、それぞれの測定尺度で測定されているものは弁別されると理解され、PEPQ 日本語版は弁別的妥当性を有し

ていると考えられた。そして、社会不安障害の診断を受けた患者群と学生群の点数を比較することで行った判別的妥当性の検討では、PEPQ 日本語版の得点が群によって大きく異なることが示された。PEPQ 日本語版によって、臨床群の PEP の活性化を抽出することができることが明らかとなったといえる。

これらのことから、作成された PEPQ 日本語版は一定の信頼性と妥当性を有した測定尺度であると考えられた。最後に、PEPQ 日本語版による得点の性差を検討したところ、男性に比べて女性で得点が高い傾向が認められた。このことから、女性は男性よりも社会的状況の後に PEP が活性化されやすいことが示され、今後は PEP の活性化を検討する際には性別を考慮した検討を行っていくことが必要となる。

社交不安が高い人は、社会的場面を経験した後、PEP の活性化が事後処理の端緒となって気分状態の悪化やその維持につながったり、次に経験する社会的場面の予期不安が高まって回避行動も促されることが示されている（五十嵐・嶋田, 2018<sup>15)</sup>）。したがって、PEP の活性化は社交不安症状の維持に非常に大きな影響を持つ。この処理の活性化が生じているかどうかを的確にアセスメントすることは、不安症状が長期的に維持されやすいかを説明することに役立つだろう。さらに、PEP の活性化の低減を図る介入実践を行うことで、症状の維持に対する有用な手立てを検討することにつながる。今後は、作成された PEPQ 日本語版を用いながら、この処理の特徴をより詳細に記述して検討されることが期待される。

## 文 献

1) Clark, D. M. & Wells, A. (1995). A cognitive

model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneier (Eds.), *Social phobia : Diagnosis, assessment, and treatment*. New York : Guilford Press. pp. 69-93.

2) 五十嵐友里・嶋田洋徳 (2008). post-event processing Questionnaire 日本語版の開発 日本行動療学会第34回発表論文集, 444-445.

3) McEvoy, P. M., Mahoney, A., Perini, S. J., & Kingsep, P. (2009). Changes in post-event processing and metacognitions during cognitive behavioral group therapy for social phobia. *Journal of Anxiety Disorders*, 23, 617-623.

4) Abbott, M. J., & Rapee, R. M. (2004). Post-event rumination and negative self-appraisal in social phobia before and after treatment. *Journal of Abnormal Psychology*, 113, 136-144.

5) Rapee, R. M. & Heimberg, R. G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 35, 741-756.

6) Kocovski, N. L., Endler, N. S., Rector, N. A., & Flett, G. L. (2005). Ruminative coping and post-event processing in social anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, 43, 971-984.

7) 五十嵐友里・嶋田洋徳 (2009). post-event processing の思考様式における特徴 日本行動療学会第35回発表論文集, 570-571.

8) Rachman, S. J., Gruter-Andrew, J., & Shafran, R. (2000). Post-event processing in social anxiety. *Behaviour Research and*

- Therapy*, 38, 611-617.
- 9) McEvoy, P. M., & Kingsep, P.(2006). The post-event processing questionnaire in a clinical sample with social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 44, 1689-1697.
  - 10) 名倉祥文・橋本 幸.(1999). 考え込み型反応スタイルが心理的不適応に及ぼす影響について 健康心理学研究, 12, 1-11.
  - 11) 杉浦義典・丹野義彦 (2000). 強迫症状の自己記入式質問紙 精神科診断学, 11, 175-189.
  - 12) 笹川智子・金井嘉宏・村中泰子・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版作成の試み一項目反応理論による検討一行動療法研究, 30, 87-97.
  - 13) 石川利江・佐々木和義・福井 至 (1992). 社交不安尺度 FNE・SADS の日本語版標準化の試み 行動療法研究, 18, 10-17.
  - 14) 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673-679.
  - 15) 五十嵐友里・嶋田洋徳 (2018). 出来事の事後の認知的処理が社交不安に与える影響—post-event processing, 反すう, 心配による社交不安症状の維持メカニズム— 東京家政大学附属臨床相談センター紀要, 19, 47-54.

## Abstract

High social anxiety is characterized by post-event processing (PEP), a retrospective cognitive process that takes place after social situations (Clark & Wels, 1995). Rachman et al. (2000) developed a post-event processing questionnaire (PEPQ) as a self-reporting scale to measure PEP, and McEvoy & Kingsep (2006) confirmed its reliability and validity. However, we do not have such a scale to measure PEP in Japan. In order to measure PEP appropriately, there is a need to develop and standardize the Japanese version of the PEPQ. Therefore, in this study, we created a Japanese version of the PEPQ and examined its reliability and validity.

**Keywords** : Social anxiety disorder, Social anxiety, post event processing, Rumination, Worry